
短編

更紗。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編

【Nコード】

N3463E

【作者名】

更紗。

【あらすじ】

チヨットワカリニクイハナシニナツテマス・ハジメテノトウコウ
サクヒンデス。イロイロメンドクサイコトシテココマデキマシタド
ウゾヨロシク

緋色の部屋にでかかどポスターが貼つてある目を凝らしてみるとそれは運動服を来た少年が照れた笑みを溢した……俺の写真だ

「おい……」

俺はその部屋の中心のちゃぶ台の前で胡座を掻き何かを読んでる少年に向かい声をかける「ん？」

いや、わかれよこの俺が困惑しないわけないだろなんせ天井、壁

机の上の写真立て俺の顔、顔、顔 可笑しいだろ。

「おい」

今度は少々声を荒げてみる

男は顔を上げ俺と視線を合わす俺は目で自分が微笑んでいる写真に目を配せる

ああと少年は俺に輝いた顔を向けるその不気味さに俺はじりつと後退さつた様な気がしたしかし「何？」さもこれが当たり前とゆう顔で聞いてきた「……何？てコッチが聞きたいここで俺は問い質すこともしなくて……帰る」ぼそつと呟くと俺は少年にくるりと背を向ける。気持ち悪い。まるで悪夢だ

すぐ背後にあつたドアをおもむろに引き外へと飛び出す

ハア……はあ……は

俺は息も絶え絶えに紅く染まる公園の水飲み場にしゃがみこんだかれこれ10分走つただけなのに、俺って体力無え追いかけてくる気配はなかった俺は阿呆か……シヨックだった好きだったのに、アイツがまさか俺の写真を敷き詰めその上で胡座を掻くような奴だなんて「信じらんねえ」ハハハ笑おうぜ、そうさアイツも俺のことが何らかの意味で好きだったのだ。世の中にはそうゆう奴いるじゃねえか、ただ俺が当たり前にそうゆうことをされるのがこの上無く屈辱

的だったのさ。

て結局電話やら掛かることは無くて翌日

「…」いたよそうだよな〜アイツが俺の家を知らない筈無い隣同士
って訳じゃないけど徒歩五分昨日の公園より近いそんなでもって保育
園からの幼馴染み、そんなでもって仲良いなだよなあクソ

「ピンポーン」鳴らしちゃったよ「あらあ〜降〜文夜ちゃんよ〜」
あ〜あ予想通りだ

「…」「〜」「…」気不味いあ〜もお俺こつゆつのすっげえ嫌なんだよ
な!

「昨日のコトなんだけどさ…」他に考え付かなくて取り敢えずコイ
ツが何故わざと来たのか知りたくなった

「ボク」「!?!」「ボクウ?」「ぷ…予想通り」

「!?!?!?!?」「カツと全身に熱が廻った、

「…そう」謎掛けをしてるんじゃないんだよ常々思う俺って口下手
そして奴は意味不明なんでこんな奴て思う

「君に会いたくて」

「へっ!?!?」「素で惚けた顔してるのが自分でもわかるけれど何は
ともなくその真摯な瞳にドキツとして見つめあっていると世界でふ
たりだけの様な気がしたテレパシーであるのかなあなどと結論付ける

ぎゅっと抱き締められる「な…」何！？何が起きたのかとあたふたとそいつの中でもがくびくともしないし黙ったままで恐る恐る問い掛ける「文夜？」もぞりと動く「文夜？」顔が見えない「俺ってさ、お前の事…」？好きかな「平気だよ」その普通の人が聞いたらキレるであろう言葉に俺はどうしようもなくすとんと安堵したすーっと頬に涙が伝う

「クク…帰るってどこ帰ったんだよ馬鹿」「…！？っうるさっ！」「隆、俺のこと試すなむかつく」「ごめん…ごめんな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3463e/>

短編

2011年1月28日09時26分発行